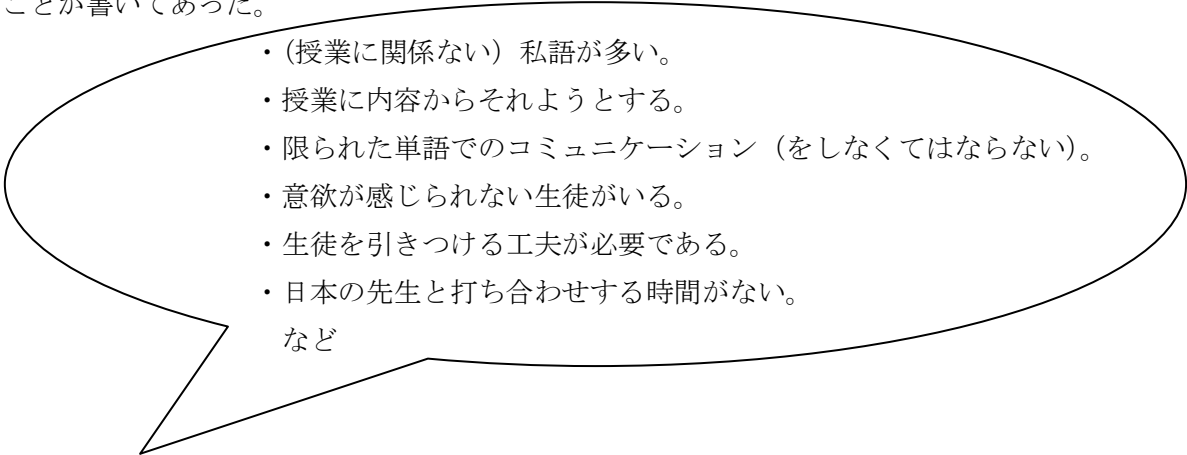


外国人からの視点と高校英語

先日、日本の学校で指導している高校で指導しているALTたちの集まりがあり、彼ら彼女らの悩みを聞くことができた。

というか、私は参加していたのではなく、終了時にホワイトボードに書かれていた英語のメモを読む機会があった、といった方がよい。したがって、走り書きを見て、私が勝手に理解したことなので、正確である保証はない。

こんなことが書いてあった。

- 
- ・ (授業に関係ない) 私語が多い。
 - ・ 授業に内容からそれようとする。
 - ・ 限られた単語でのコミュニケーション (をしなくてはならない)。
 - ・ 意欲が感じられない生徒がいる。
 - ・ 生徒を引きつける工夫が必要である。
 - ・ 日本の先生と打ち合わせする時間がない。
- など

by ALTs

私が現場で授業を行っていたときと大きく違うことに、驚きというか、安心というか、納得というか、思わず微笑んでしまった。(不謹慎?!)

さて、自分は中学理科の教員なので、他教科について言及する資格はないが、英語については興味がある。

様々な特色を持っている高校があるので、つぶやきの内容が高校生に対する一般的なものでないと思う。ほっておいても英語に興味(必要)がある生徒の集まりもあろうが、英語を含めて学ぶことに意欲が少ない集団もある。外国人教員であろうが生徒に応じた指導をする必要があると思う。

さて、教育政策各論についての言及は避けるが、日本における英語の指導は難しいと思う。高等教育まで母国語で学ぶことができる国は少ない中での学校教育である。国民全員が英語でコミュニケーションを行うことができるようになることは理想だが、そんなことは不可能であるというよりは、そこまでの必要性があるのかということもあろう…。話を元に戻そう。

授業に外国人教員が入ること。こんなすばらしいことはない。高校教育は、義務教育と根本的に違うので、学校の目標や生徒の状況に応じて、英語を用いてのコミュニケーションの質と内容を変えて経験を持たせることだろう。

さあ、15年後ぐらいを考えよう。最高レベルの学校教育キャリアを積んだ生徒でも英語が「だめ」な場合があり、そうでないレベルの層でも興味と必要性によりすばらしいスピーカー、コミュニケーターができることもある。我々教員は、生徒との数年間を考えがちだが、視点を近未来へ据えて教育を行っていききたいものである。

教育は、成果テストのスコアアップを目的とするものではないことを英語を通して再度考えたい。